沖縄抜きの安保なし

総評、沖縄との連帯強化へ

「安保破棄」「沖縄即時返還」を目指す七〇年闘争への歩みがいよいよ本格化しているが、総評は対策の一つとして〝沖縄と本土を結ぶ代表団〟を、さきほど沖縄に派遣した。

代表団は八百人で、三池労組からは渋田書記次長（組織担当）が参加した。

去る四日東京港出発、十日に帰着する間、沖縄を襲った暴風雨としては戦後最大のものといわれる嵐をついての交流だったが、双方の連帯を強める上で大きな役割を果すことができてさいわいだった。

「とにかく苦しい毎日でした」と述懐しながら、渋田次長は語った。

渋田次長の話

アメリカの圧政については聞いていたが、あまりにもひどい事実におどろいた。

彼らは政治的に支配しているばかりでなく、経済的にまで支配している。電気はアメリカの電力会社に独占され、逆にこっちがそれらを買わされている。もちろん、道路行政もすべてアメリカの手の中にある。

そのため沖縄の人々の生活水準は低く、本土の約六〇％。健児の塔やひめゆり塔の前で、花を売ってその日を食いつないでいる老人がいる。まさに戦後そのまま。第一沖縄の人々は、すべてが遺族であると聞かされおどろいた。

向うの祖国復帰の願いの強さはなるほどと思われるが、しかし民族主義的面が強く、その中を貫く階級的視点がない欠点がある。そこをうまくつかれて、沖縄で戦死した牛島中将のことを民族的英雄として美化したりするあやまった傾向があった。官庁などの管理職なんか、本土に呼ばれて、返還後の沖縄行政にそなえるための教育さえすすんでいる。いよいよ、沖縄問題を無視しての安保闘争は考えられなくなってきた。

まさしく、沖縄の中にアメリカの基地があるのでなく、基地の中に沖縄があるということができる。アメリカの、ベトナム帰りの海兵隊が駐屯する基地の辺りでは始終刃傷沙汰が絶えず、昨日まで自分の土地だった畑に耕しにいくと、いつの間にかアメリカに収容されているということで、MPからパクられる。

こんな圧政下にある沖縄の同胞たちを、過去二十数年間も放ったらかしにしていた本土の私たちはいまこそ重大責任を感ずべきときだと思う。重ねていうが、沖縄を抜きにした安保問題などあり得ない。

一人入院六人時短

職場復帰したCO患者に中毒症の増悪傾向強まる

三池労組は現在、坑外の軽作業の転場に復帰しながらも、中毒症がハッキリと増悪してきたCO中毒患者七人のために、入院（一人）と労働時間短縮（六人）の必要のあることを訴え交渉してきていたところ、今月に至ってついに会社側に認めさせることができた。

これによって同転場の斉藤彼意さん（楓町居住・昭和四十三年七月復帰）が、十三日から大地評曙病院に入院、ほか小山季之さん（新港社宅）、松本博さん（平井）、狩峰俊幸さん（原万田）、沢田丈夫さん（同上）、江口忠雄さん（日井社宅）、緒方務さん（大谷社宅。何れも昭和四十二年一月転場復帰）らが、今月はじめから勤務は午前中までとなった。

これらの人々のことは、CO中毒患者ばかりが結集されている三川指導部の十一転場分会ですでに早くから提起されてきた問題だった。

「この人たちの中毒症はハッキリと増悪している。どうすべきか、何はともあれ民主的な医師の検診をいそぎ要請し、正しく処置すべきだ」

というのが同転場の要請だった。

三池労組としてはさっそく金子・吉田・小鹿原の各医師を招き検診を依頼したところ（九月下旬）その結果「斉藤さんについては一日も早く入院する必要があるが、そのほか、問題の患者たちの状態も、ほんの体調らし程度の労働しか許されない」ということが明らかとなったのだった。

十一分会ではかねて「労働時間の短縮」「診療に必要な時間の賃金補償」などの要求をもって、ねばり強く転制と交流をもち、つき上げてきていたが、それが原動力となったのである。

なお現在も、昭和四十一年の十一月に、政府からそれまでの労災補償を打ち切られたCO中毒患者でありながら、いまもひきつづき入院している人が六人もいる事実は重大である。

とまれ、坑外の軽作業に転場復帰したCO中毒患者の中から、このように増悪する人がではじめている（その中の一人、西本正人さんは死亡した）事実は、改めてCO中毒問題の深刻さ、これからの労働災害がもっている重大性を示したもので、まさしく命を守る闘いへの警告といわなければならない。

「みいけとアンポ」

評判まき起こした〝標的〟

この頃、本紙の中の記事が大評判をまき起こし、各地から「みいけを読みたい」「ぜひ送ってほしい」と手紙が組合本部に殺到、関係者をびっくりさせた中には、「自分は今年一月から獄につながれている」という一人の学生運動指導者からさえ、やってきた。

大評判は、朝日新聞がその夕刊に毎日掲載している〝標的〟欄がその九月二十日号でとりあげた「みいけとアンポ」が呼び起こしたものだった。サテ、その内容は次の通りである。

×

七〇年安保が、政治の焦点に上がってきている。七〇年安保というと、当然に十年前のことが、想起されてくる。

十年前の闘争には、致命的な弱さがあった。街頭の市民的高揚と生産点の闘争の結合が、〝安保と三池〟の合言葉でいわれた。そして二つの結合は、うまく行かなかった。

その三池がどうなっているか。三池労組の機関紙〈みいけ〉は、八月一日号から「おれと安保」を連載しだした。

一回目は、定年退転した塚本正男さん、たとえ退転しても三池を支えてゆくという決意。九月一日号は、平川さん夫婦の「人から意地っぱりね」といわれながらも、低賃金に耐えがんばっている話。

その三池労組は、いま、「命を守る闘い」を中心に、七〇年安保をめざしている。

〈みいけ〉は、三池CO患者・遺族を守る会のニュースもかねている。

去るも地獄、止まるも地獄といわれた苦境をこえて、三池労組は明るく意地を張っている。

（以上はその要約）

×

どうやら、きたるべき七〇年闘争に対しても、三池労組の責任は重そうである。

おれと安保

【3】

統一の展望はみえた

その時のために準備を

四山 宮川澄雄さん（31才）

今回は四山指導部宮川澄雄さん（仕繰工）の意見を紹介する。宮川さんは奥さんの例子さん（三十二才）、長男の浩一君（十才）、長女の美保さん（五才）の四人ぐらし。

苦労するための結婚？

三池労組員の例にもれず、四山鉱常一番仕繰工として働く宮川さんの留守に奥さんの内転はつづけられている。

三十一才、四人家族の宮川さんの賃金は平均して月二万五千円くらい。これに奥さんの内転事のしやすいもの、むつかしいもによる収入月平均六千五百円が加わる。

内転は三川鉱大爆発による遺族対策の工場として誘致された「アソニット」工場の下請けである。

アソニットで仕上がったシャツやセーターのソデロやポケットを針と糸で仕上げる仕事で、毎日自宅まで品物を配達し、またとりに来てくれるのがミソという仕事である。

朝宮川さんと子供たちを小学校と幼稚園に送り出すと、例子さんは朝ごはんもそこそこに八時から仕事にかかる。

一日中座ったままの針仕事で、午後四時までつづけて仕上がるのがおよそ二十枚。一枚十七円（仕事のしやすいもので十五円、十一円のもある）もらえるので、いい時で三百五十円の収入をうることになる。

低賃金で有名なアソニットの下請だけあって、夕方には必ず受けとりにくる。もし何かの都合でできあがらなければ夜になっても必ず集めにくる。一晩おけば一枚に二円の「置き代」を工場が払うことになっているから。

一方、一家四人の生活は米代、副食費、宮川さんの焼酎、タバコ、学校の費用等々をふくめ確実に赤字がつみかさなってゆく。年二回のボーナスのうちそれぞれ二万円ずつは赤字の穴埋めが待っている。昨年の八月のボーナスには奮起して一万円の貯金をした。これはその年の暮れの買物の準備としてだったが、翌月から二千円、三千円とおろしていき、年の暮れには百円しか残っていなかった。

「本当に、苦労するために結婚したようなもの」と例子さんはしみじみと語る。

左ウチワの時がくる！

こんな奥さんのグチには歴史がある。昭和三十九年から一年半宮川さんは結核でたおれ、二人の子どもをかかえて苦労し抜いたこと、そしていまの、まるで丸木一本橋を渡るような不安定な生活のことが、ついそんな言葉となって出てくる。

こんなときに宮川さんは、「あと八年すればもうグチもいわんでよくなるよ」と答える。この八年たてばという宮川さんの答えの理由はつぎのようなものである。いま、浩一君が十才、あと八年たてば高校を出る。そして就転してかせぐ。五才の美保ちゃんも中学生で手はいらなくなる。自分は四十才ぐらいで働きざかり、「バリバリかせぐ」ので、「お前はもう内転もせんで左ウチワでよかたい」

「行きそこなった新婚旅行にもつれていく」ということになる。

だから、それまでは「お前のグチをダマって聞いとくたい」と大真面目にいうので、つい例子さんも笑い出してしまう。

展望ということ

これは宮川さんが奥さん説得のために考えだした「闘いの展望」ではない。宮川さんは闘争後十年の闘いをふりかえって、つぎのようにいまの闘いを語っている。

「三池闘争のときは本当に勝つと思っていた。闘争中は青行隊として支部にとまりこみ勝利を信じきって闘った。しかし、あの藤林あっせん案をハネかえせなかったときは、本当にもう仕事もしたくないと思った。

就労してみると、転場はひどい、災害はおきる、第二組合へは脱落するという状態がつづいたが、この十年の闘いを通してみると、たしかに第二組合員は変ってきた。とくにこの一、二年は、はっきりとわれわれに同調する第二組合員はふえた。CO闘争以来、第二組合員の署名やカンパがとれるようになってきた。とくに、四山鉱はZD運動が浸透していて、第二組合員はハッキリと会社に組織されているように見えていたが、つい最近、私の転場でZD運動ということで第二組合員同志が係員に相手の欠点を密告し合っていることがバレて、お互い同志の大ゲンカになった。

これには年寄りの第二組合員も同調して大さわぎになり、係員が仲に入ってもおさまらない。

ZDが一番進んでいたので、こんな感情の爆発も一番ひどかった。

こんなことを考えるならば、何十年という、われわれの長い闘いの歴史から見れば、七十年代は三池の労働者の闘う統一が再びかちとれる時代とはっきりいうことができるのではないか。

だから、問題はわれわれの闘う主体を、いまのうちに打ち固めておかねばならないし、〝統一したときの組織づくり〟まで見通したわれわれの学習や運動を五年、十年という見通しと計画をたてて、いまからやりはじめなければならないだろう」

「三池労組は少なくなっても第二組合員はいるのだし、矛盾はますます深まっているのだから、労働者の統一を目にすることができる時代に入った」

このような確信が宮川さんの「八年左ウチワ説」の理由であるし、だからこそ苦しい毎日の家族ぐるみの闘いが今日もつづくのである。

宮川さんの安保闘争は確信にみちている。

宮川澄雄さん一家

秋の内面

三川 K生

秋の黄昏は
みじんに砕ける
ステンド・グラスの投影だ
楠の樹蔭
枯れそめた草むら　又は
遠いやまなみの　その辺り
血の色に燃える
ああ　一一・九よ

転場新聞〝いのち〟（三川十一分会から。